

# 松波むかし語り ここに住み続けて その32

## 今回のお客様

敬老会で年季の入った踊りを披露してくれる

たか はら やす こ  
高原 康子 さん 69歳 2丁目

“習い事はいろいろしましたが、  
踊りだけは今も続いているんです！”



高原さんがこの町に住んで 60 年になります。松波から登戸小へ通う最後の卒業生という高原さんは、小学 4 年生の昭和 28 年に一家で松波に越してきました。神田の大きな金物屋に生まれた高原さんは、ハキハキしたもの言いが特徴です。終戦の年、愛知県豊橋市の郊外へ疎開、ご両親はそこでお百姓を始めました。「頭を使うのが父、体を惜しまずに動くのが母でした。朝 3 時に起きては草取りをしてましたものね」。その働き者のお母さんは昨年 10 月、99 歳で前の日まで手を動かしながら、翌朝突然亡くなりました。

愛知では、東京から持って行った魚のくずが効いたのか、できたお米はなんと特等米。しかし一家は戦後、親類を頼って松波へ越してきて、2 丁目の今よりずっと急だった坂道に松屋洋品店を開きます。「最初は炭屋をやろうと、貨車いっぱいの燃料を買い込んだのですが、燃料店はすでにあつたもので、父が修行して洋品店を始めたんです」。

子ども時代の高原さんはどんなだったんですか？ 「千葉商の元の正門の前は今も坂道になってるでしょう。あそこで私は、おとなの自転車を三角こぎして自転車を覚えたんです。それが勢いが良すぎて、いまは小野寺産婦人科になっている畑にそのまま突っ込んだりして……」。勇ましい子だったんですね。「ところがそうじゃなくて、子どもの時分は風邪を引くと肺炎になるほど体が弱かったために、父が『住むなら、医者の近くがいい』と言って今の場所を探したほどなんです」。



敬老会のたびに披露していただく踊りは、高校時代から本格的に始めたものです。「どうやったらうまくなれるだろうかと、うまい人を見て観察したものです」。習い事の中で、踊りだけは今まで続いたそうが、さすが年季の入った身のこなしです。昭和 42 年に結婚して 2 人の男の子の母となり、「母がいたので子育てはお任せだった」と言いますが、弥生小 P T A では副会長を務めました。

「松波ですか？ 住みやすいのは近所の人がいいからでしょうね。必要以上に干渉しないのに、困ったら助けてくれますから」。高原さんは、今日も踊りの仲間との交流や老人会にと忙しい毎日です。

平成 23 年 千葉市舞踏連盟舞踏祭りにて